

古文

うたの心 「詩歌」

折々のうた 大岡 信 「全四回②」

古今和歌集



講師  
山本章博

学習のねらい

古今和歌集

大岡信『折々のうた』に取り上げられた『古今和歌集』の歌を、その解説文を参考としながら読んでいきます。『古今和歌集』に関する基礎知識を押さえたうえで、夏歌と秋歌を読み、季節をどのように表現しているのかを考え、鑑賞します。

● 学習のポイント

- 〈一〉 『古今和歌集』について知る
- 〈二〉 「五月待つ……」の和歌を理解し鑑賞する
- 〈三〉 「秋来ぬと……」の和歌を理解し鑑賞する

『折々のうた』の作者の大岡信は、昭和六年の生まれで、平成二十九年に亡くなりました。静岡県三島の出身で、学生の時から詩を書き始めました。大学卒業後、新聞記者となり、その後、大学の教員となりますが、その傍ら、活発に執筆活動を続けていきました。

■ 『古今和歌集』について知る

- 成立
- 平安時代、九〇五年頃。
- 初めての勅撰和歌集。醍醐天皇の命によって作られた。
- 撰者は、紀貫之ら四名。
- 内容
- 全二十巻。約一一〇〇首。
- 全二十巻のうち、四季（春夏秋冬）の歌が六巻、恋の歌が五巻。
- ↓以降の勅撰和歌集も、四季と恋の歌を中心とする。

## ■「五月待つ……」の和歌を理解し鑑賞する

夏の五月になって咲いた橘たちばなの花の香りをかいだ。よい香りだと思っていたら、ふと、昔の人の着物の袖の香りを思い出した。この橘の香りは、昔のあの人の袖の香りと似ている。あの人は今、どうしているのだろうか、という意味の歌です。昔の人とはどのような人か、想像してみましょう。また、何かの香りによって昔を思い出すという経験はないか、振り返ってみましょう。

### 【重要語句】

- 五月……：陰暦の五月のこと。陰暦では、一〜三月が春、四〜六月が夏、七〜九月が秋、十月〜十二月が冬となる。
- 花橘……：橘の花のこと。五月に咲く。

## ■「秋来ぬと……」の和歌を理解し鑑賞する

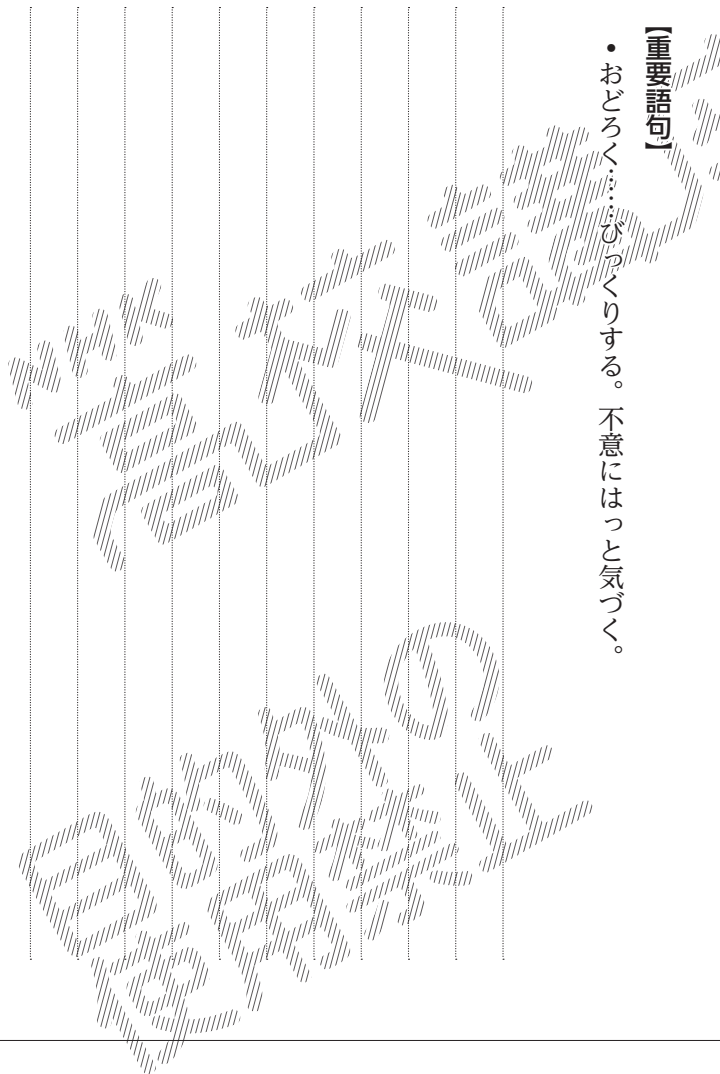
「立秋」を詠んだ歌です。秋がやって来たと、目にははっきりとは見えないけれども、風の音に、秋になったんだと、はっと自然に気がついたよ、という意味の歌です。

桜が咲いたり、紅葉したりすると、その季節を実感すると思いますが、風の音や香りに季節の移り変わりを感じたことはないでしょうか。

今回の『古今和歌集』の二首は、嗅覚や聴覚の繊細な感覚が詠まれています。その感覚を想像してみましょう。

### 【重要語句】

- おどろく……：びっくりする。不意にはっと気づく。



古文

折々のうた 大岡 信

古今和歌集

講師  
山本章博

よみ人しらず

五月待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする

【現代語訳】

五月になって咲く橘の花の香りを嗅ぐと、昔の人の袖の香りがするよ。

「五月」は陰曆五月。「花橘」は橘の花を褒めていう。「昔の人」は昔恋人だった人、ここでは女性。橘の花の芳香が、かつての思い人の袖にたきしめられていた香りを、突然よみがえらせたのである。平安朝の詩人たちは、嗅覚の刺激が過去を呼び戻す事実に関心をそそられていた。それは当時における新しい主題の一つだった。この歌はたいそう愛されたので、「花橘の香」といえば「昔の人」という連想の型ができたほどだ。

藤原敏行

秋来ぬと目にはさやかに見えねども風のおとにぞおどろかれぬる

【現代語訳】

秋が来たと、目にははっきりとは見えなくても、風の音にはと気がついたよ。

秋歌巻頭の立秋の歌。「おどろく」はにわかにつく。まだ目にはありと見えないが、ああもう風の音が秋を告げている。目に見えるものより先に、「風」という「気配」によって秋の到来を知るといふ発見が、この有名な歌のかなめである。つまり「時」の移り行きを目ではなく耳で聴き取る行き方で、より内面的な感じ方である。これが後世の美学にも影響を与えたのだった。